

[特別講演]

方技概説

家本 誠一

1 はしがき

私は、平成七年から八年にかけ、東京の医史学会例会に於いて、四回に亘り、漢代の解剖学、陰陽、五行、三才の各テーマに就いて其々一時間の口演を行なった。本稿では其の要領を述べる。

日本人は六世紀以来、中国医学を輸入して民生日常の用に当ててきた。今に千五百年である。習熟するには十分の時間である。所が江戸時代の中頃に至って、此の医学は良く分からないと言い出した人がある。伊勢松坂の医師にして国学者になる本居宣長である。

「夫れ素（問）靈（枢）は軒（轅＝黄帝）岐（伯）の（偉）大（な）經（典）にして寿世（長寿の為）の大（切な）法（典）なり。医を為す者、此れを舍（お）きて奚（なに）に従って以て其の道を知らんや。而るに、其の後世に益無き者は、独り何ぞや。蓋し、其の（論）旨（迂）遠く、其の（技）術亦た奇（怪にして）、融解す可からざるを以ての故に爾り（送藤文輿還肥序）」

素問、靈枢は中国最古の医学書である。中華人民の祖先で、軒轅に都した黄帝と其の臣下、岐伯の問答が主体をなしている。宣長が云う様に中国医学の基本的な經典である。此れが分からなければ中国医学は分からない。宣長と同時代人で古方派漢方の豪傑である吉益東洞は陰陽五行や蔵府経路は医に用無として否定した。中国医学の骨組も内容も合わせて捨ててしまったのである。東洞に追隨して、昭和の漢方研究者たちは、漢方は学ではない、術である、理屈はいらない、効けばよい、と称して、此の医学を処方検索の技術に矮小化してしまった。そして傷寒論を偏重して、素問靈枢を観念的迷信的として拒否し、其の研究を怠って来た。かくして日本人は千五百年の年月を費やして、今尚中国医学を総合的体系的に把握出来ないでいるのである。

中国医学の根幹は古代に在る。真相は比較に依って明らかになる。古代が分からないと中世も近世も現代も分からない。更には世界の古代医学が分からなくなる。ギリシャだけでは古代医学の真相はつかめない。

古代医学は素問、靈枢、傷寒論、金匱要略、神農本草經という五つの基本的文献を持っている。此等の書籍を総合的に研究し、其の内容を有機的体系的に把握して、始めて古代医学は理解出来る。素問、靈枢を疎外しては其れは不可能である。私は素問、靈枢に基づ

いて中国古代医学の真相を闡明したい。

2 方技

漢代、中国では、医薬に関する技術は方技と呼ばれた。方は耒（鋤）の象形文字で、左右に張り出た柄が直線状に伸びることから、方向、道筋、方法、技術の意味になった。技は細かな手わざである。似た言葉に方術、術数などがある。此れも医卜星相の技術で、医学以外の諸術も含む。医師は医或は工と呼ばれた。医とは病を治する工なり、と説文にある。工とは技術者のことである。

3 歴史

紀元前五百年期、古代世界に於いて思想哲学革命が起こる。前代の神秘的、アニミズム的な思想は否定され、論理的合理的な思想が成立した。中国では、前一千年の殷周革命は其の先駆となった。殷人は鬼神を尊び、周人は人を尊重し礼儀を重んじた。此れより諸子百家の古代合理主義が興隆し、百花斉放の盛況を呈した。孔子は其の中の一人である。

此の思想哲学革命を背景にして古代科学が成立する。古代医学は其の一環をなす。中国に於いては鬼神の世界、巫祝の医学を否定して、論理的合理的実証的な医学を構築した。其の成果が、漢書芸文志の方技略に著録された書物である。漢代の医師たちは其の医学が鬼神の世界を離脱し、巫祝の医学の否定の上に築かれたことを明確に自覚している。

4 時代

論語、孟子には陰陽という言葉は殆ど見られない。前三百年頃の莊子や鄒衍に至って盛んに使われる。陰陽、五行は素問、靈樞の根幹を作る枠組み概念である。中国古代医学は略此の頃より発足したと考えられる。呂氏春秋や淮南子には素問、靈樞と共通する思想が見られる。前二百年頃の馬王堆医書には靈樞の経脈第十の原型と思われる文献が含まれている。史記、扁鵲伝の医学は素問、靈樞の医学と略重なる。紀元十六年の漢書、王莽伝の解剖記事は靈樞、難經の解剖記事に対応している。八十年頃の漢書芸文志、方技略は前漢後期の医学の状況を示している。以上の時代が漢代医学の最盛期で、二百年頃編纂された傷寒論、金匱要略の著書らには、既に素問の解剖学が良く分からなくなっている様に見える。三百年頃に出た脈経、甲乙経は古代医学の最編集本でこの頃、古代医学の学術的創造力は枯渇していたのであろう。

以上により、中国古代医学は、前三百年から後三百年の約六百年間に黄河を中心とし、長江に及ぶ地域で行われた医学である、と定義することが出来る。三世紀の末、四世紀の始め、八王の乱、永嘉の乱により、北中国は戦乱と飢饉によって荒廃し、人口は激減し、古代の書籍も大量に喪失した。この時、古代の医学も亦正確な伝承を失ったのであろう。

中世以降は誤解と憶測の下に継承され、今日に至っている。中世は尚お古代の骨格を保っていた。近世以後は古代の実証性を喪失し、憶測と思弁の医学となった。

5 特徴

方技すなわち中国古代医学は次の様な特徴を持っている。

- 1 総合的体系性
- 2 実証的合理性
- 3 論理的整合性
- 4 臨床的有効性
- 5 實際上安全性

6 総合的体系性

漢書・芸文志方技略には四つの部門の医書が集録されている。医経には黄帝内経など、医学の体系が記されており、医学の全ての部門を含んでいる。経方には風寒熱十六病方など疾病各論と治療各論が属している。房中は医学的セクソロジーであり、神仙は不老長生術の研究書である。以上により方技が医学の全ての部門を持つ総合的な体系性を備えた学術であることが分かる。

7 実証的合理性

中国古代医学は前代のアニミズム的シャーマニズム的な鬼神からの離脱を以て其の合理主義を確立した。「(医の)道に鬼神(神秘的超越的存在は)無し。(我々は鬼神に捉われることなく)独り来たり独り往く(独立自由だ)。宝命全形論25」。また「鬼神に拘る者は與に至徳(最高の真理、ここでは医学)を云う可からず。五蔵別論11」。此等は其の宣言である。古代医学は其の方法として、正確な観察と精密な度量、合理的な類推と鋭利な洞察を駆使している。解剖学は其の一面である。

8 解剖

解剖という言葉は靈樞の経水第十二に出ている。解剖の記録は漢書、王莽伝に在る。漢代の解剖学の主要テーマは、蔵府の計測と経路の走行経路に在る。経路とは血管と神経である。血管系統の主幹に就いては略正確に把握し記載している。古代解剖学の描く人体の構造は医学史が述べる様な荒唐無稽なものではない。人体は五つの系統に分類され、各系統の間にフィードバック・システムを装備したダイナミックな動的平衡系として把握されている。

9 論理的整合性

中国古代医学は、其の医学的経験と知識を整理統合するに当たって、三つの枠組概念を利用した。陰陽、五行、三才である。此等の概念は中国医学を観念論的迷信に陥らせた元凶として指弾されてきた。併しそれは誤解或いは無理解による。此等の概念はそれ自体に於いて合理的であり、医学に於ける利用に就いても概ね妥当である。

現代物理学によれば、世界は物質とエネルギーより成る。此れに情報を加えることもある。情報とは物質とエネルギーの存在様式である。此の観点から、此等の枠組概念を見ると、陰陽はエネルギーに関する概念であり、五行と三才は物質とエネルギーの存在パターンに関する概念である。此の陰陽、五行、三才は自然と人体に就いて合理的且つ整然たる叙述を此の医学に与えている。

陰陽は太陽エネルギーの地上に於ける存在様式である。日の当たる「エ」の豊富な丘が陽である。陰湿で「エ」の少ない日陰の所が陰である。陰陽は人体に於いては現代医学の自律神経系とほぼ同様の機能を担っている。陰は同化的に、陽は異化的に作用する。昼間は陽優位、夜は陰優位である。病理的には陰は悪寒、陽は発熱をもたらす。睡眠、食欲、便通、発汗などの調整も陰陽の仕事である。

五行は民間日用の五つの資材と云うが、疑問がある。恐らく中国の黄土の上に展開する四季の景観の推移から考え出されたものであろう。医学上では次の曲面で利用される。解剖学的には臓器組織の五系統分類と其の機能関連の構築。臨床的には、蔵府の相克関係に基づく疾病の経過論、予後、転帰の判定。

三才とは天地人である。宇宙を構成する三つの要素である。医学上では病因論と其れに基づく疾病分類に使われている。其の病因論は宇宙論的空間的で、現代医学の其れが進化論的時間的であるのと対照的である。併し内容的には略重なる。

10 臨床的有効性と實際上安全性

臨床に関する学術も、漢方の述べる所とは大いに異なる。其の詳細は略す。此の医学は多くの治績を挙げると共に、多くの医療過誤も犯している。三世紀末、古代世界の崩壊と歩調を合わせて、創造力は枯渇し、其の伝承を失って行った。